

研究ノート

大阪市立美術館所蔵『九曜秘暦』覚書

当館は『九曜秘暦』(紙本墨画・一巻・29.8×675.4)といふ白描図像を所蔵している。本誌『美をつくし』でも、昭和47年(1972)70・71号と平成22年(2010)173号掲載の記事で、それぞれ当館学芸員であった阪井卓氏と石川知彦氏が言及しているが、本格的な紹介には至っていない。その存在の希少さに比して、これまで注目されることが少なかった当館の『九曜秘暦』(以下、大美本)について、いま、わずかな紙面ではあるが取り上げてみたい。

白描図像とは経典に説かれた仏の姿かたちなどを図絵したもので、墨線のみあるいは淡彩で描かれるためにこう呼ばれる。そもそもは入唐僧が中国より持ち帰ったことがその始まりと考えられ、密教において教えを伝承する重要なテキストとして時代を超えて繰り返し書き写され、寺院のなかで師から弟子へと大切に受け継がれていた。密教僧たちは研究資料として古今東西の図像を蒐集し、平安時代以降には多くの図像集が編纂され、さらには新たな図像が作られた。

『九曜秘暦』もまた、種々の經典や図像を参考に密教僧が創案したと考えられる。九曜とは、日曜・月曜・火曜・水曜・木曜・金曜・土曜の七つの天体に、羅睺・計都の二つの妖星をくわえて神格化したもので、『九曜秘暦』とはつまり、星の神々の図像集である。このような星への信仰は古代中国から日本に伝えられたが、九曜の図像やそれにまつわる經典も、元来は中国から伝來した。挿図のように、ある者は女神、ある者は武将といったさまざまな姿に描かれ、星それぞれの働きについて説明が付されている。

大美本はもと京都・西明寺に伝わったものである。絵画としての出来栄えは優れているとはいがたく、のっぺりとした顔には稚拙さがただよう。同じく西明寺旧蔵の『図像抄』(本館蔵)とひとそろいで伝來したようで、『図像抄』目録には『九曜秘暦』が項目として加えられている。目録奥書には「図縁表紙願主自作日光坊実乗仕候 永禄十丁卯年八月六日 □(焼切)寺不出之(朱注)依為秘中極秘 □(焼切)寺之内ヨリ他寺へ不可出者也」と記される。『図像抄』と『九曜秘暦』はもともと全く別に成立した図像集だが、文字や画風からともに室町時代末期・永禄10年(1567)に書写されたとみてよいだろう。わざわざ

寺院名を焼いており、当初から西明寺に伝わったのかは判別できない。けして他の寺へは持ち出すなど記す一文からは、図像集がいかに寺院にとって重要で、かつ秘密裏に伝えられた存在であったかが窺い知れよう。また、別々の白描図像を、ある寺院のなかではひとまとまりのものとして伝承していたことも知られる。

さらに大美本の奥書には「建久二年醍醐報恩院本書写了」とあり、醍醐寺の報恩院にあった『九曜秘暦』を底本として書写されたことがわかる。建久2年(1191)は、この底本の書写年代と考えられる。『九曜秘暦』は現存する優品のほとんどがニューヨーク市立図書館やボストン美術館など、海外に所蔵されているが、この報恩院本にあたると考えられる写本は寡聞にして知らない。国内の遺例は少ないが、仏教經典や図像類を集成した『大正新修大藏經』には東寺が所蔵する江戸時代の写本が掲載されている。試みにこの刊本と大美本を比較してみると、その掲載順や図像はほぼ一致するものの、子細にみれば大正図像本に描かれる女神像が襟を前合わせにするのに対し、大美本は月曜像など一部の女神像に丸襟が採用され、衣服にはより意匠を凝らすといった異同が認められる。また、大正図像本に欠落する文字が大美本に掲載されることや、その逆の事例も確認できる。また、平安時代の写本であるメトロポリタン美術館本や鎌倉時代のボストン美術館本との比較でもこのような異同は認められ、現存するすべての『九曜秘暦』の写本と校訂を行えば、底本の系統がより詳しく分かるかもしれない。

ところで、当館には星宿像を描いた中国・梁代の絵画『五星二十八宿神形図』が所蔵されており、国内外に名品として知られている。獸頭の、あるいは動物に乗る星々のすがたは、『九曜秘暦』にも通じ、古く中国より伝わった図像が日本において変容した様子を偲ばせる。奇しくも星宿を描く貴重な二つの作品を所蔵するのだが、かたや海外にも出品される人気作品、かたや館内においても滅多に展示されてこなかった珍品である。早晚、ともに展示してみたいと密かに思っている次第である。

(米沢 玲)

<参考文献>
中野玄三「觀智院本『九曜秘暦』について」
(『続々日本佛教美術史研究』2008年 同朋舎)

本館蔵『九曜秘暦』のうち



月曜像

火曜像

計都星および日曜像

特別展

沖縄復帰40周年記念

紅型 BINGATA

琉球王朝のいろとかたち

9月11日(火)~10月21日(日)

紅型(びんがた)は琉球王朝の時代に沖縄で生まれた染めもので、王族や士族など一部のみが用いることできた格調高い衣裳でした。型紙によって防染し、天然の染料や中国渡來の顔料などを使って染めた型染めが多く、フリーハンドによる簡描も一部で用いられました。紅型の模様には中国や日本をはじめ、広く東南アジアとの交易を通して生み出された多彩なモチーフが用いられています。明治維新後の廃藩置県により琉球王国が崩壊すると、紅型制作の機会も減り、衣裳の多くは沖縄を離れ本土のコレクターや研究者の手に渡りました。

今回の展覧では琉球王国国王であった尚家に伝えられた衣裳(国宝)をはじめ、守り伝えられた琉球紅型の衣裳の優品など245点を展覧いたします。このうち洋画家岡田三郎助(1869-1939)が蒐集した松坂屋コレクション58点は初公開となります。



3



3



4

1 国宝 黄色地鳳凰編蝠宝尽くし青海立波模様衣裳
18-19世紀 那覇市歴史博物館(9/11-9/23)

2 国宝 白地流水に菖蒲蝶燕模様衣裳
18-19世紀 那覇市歴史博物館(9/11-9/23)

3 水色地菱草花に熨斗模様衣裳
19世紀 松坂屋

4 菱草花に熨斗模様白地型紙
19世紀 沖縄県立芸術大学付属図書・芸術資料館



1



2